令和６年度　「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「プロジェクト型」の共同研究　研究報告書

令和７年４月２８日現在

研究課題名	境界領域の人・場所・モノをめぐるミクロ・ヒストリーの表象と、その変遷についての研究				
申請者（代表者）	氏名		所属機関・職		
	井上　暁子		熊本大学・教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	井上　暁子	熊本大学・教授	文学・文化	代表者
	2	木村護郎クリストフ	上智大学・教授	社会言語学	分担者
	3	ミウォスワヴァ・ボジシュコフスカ＝シェフチク	グダンスク大学・教授	文学・文化	分担者

研究成果の概要

本研究プロジェクトのそもそもの出発点は、令和 6 年 6 月 28 日から 29 日、ポーランドのグダンスク大学にて開催されたシンポジウム「学術的および社会的挑戦としての境界研究――日本・ドイツ・ポーランド」である。これは、グダンスク大学ドイツ文献学学科のミウォスワヴァ・ボジシュコフスカ＝シェフチク教授率いる境界地域の記憶のナラティヴをめぐる研究チームと、上智大学ヨーロッパ研究所の木村護郎クリストフ教授、グダンスク大学国際的境界研究センター、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、カシューブ・インスティチュート、カシューブ民族誌博物館の共同企画によるシンポジウムで、日本、ドイツ、ポーランドから、歴史学、文学・文化、言語学、政治学を専門とする研究者 17 名が参加し、英語、ポーランド語、ドイツ語で発表した。ポーランド語圏では「ドイツ時代の遺産を含む歴史」と向き合うことが、1990 年代以降、現在進行形の問題として認識されてきたことが分かった。

同年スラブ・ユーラシア研究センターのプロジェクト型共同研究「境界領域の人・場所・モノをめぐるミクロ・ヒストリーの表象と、その変遷についての研究」が採択され、ボジシュコフスカ＝シェフチクの日本招聘が実現した。井上が企画した日本独文学会のシンポジウム「中東欧の見える境界、見えざる境界――求心力と遠心力のはざまで――」（令和 6 年 10 月 19 日、熊本大学開催）では、ギュンター・グラスとカシューブについての報告（ボジシュコフスカ＝シェフチク）、ソルブの言語風景にみられる戦略的実践についての報告（木村）、他者の記憶を「移植」するプロテーゼの試みについての報告（井上）が行われた。境界地域の記憶の保存、中間的アイデンティティの戦略的実践とその影響、博物館展示や文学作品の語りを含む多元性の表象といった共通の問題意識が浮かび上がった。

ボジシュコフスカ＝シェフチクは日本滞在期間中、記憶の表象、とくに、博物館展示のナラテ

ィヴを比較する視座を得るために、井上とともに東京の「遊就館」(展示替え作業で一時閉鎖中)、横浜の「海外移住資料館」、沖縄の「平和祈念資料館」「ひめゆり平和祈念資料館」「南風原文化センター」「首里城」「佐喜真美術館」を訪れた。沖縄のことばで書く作家崎山多美、琉球大学学長で環境文学研究者でもある喜納育江とも会い、交流した。崎山の「アイデンティティの話をすると、すぐ政治的に利用されてしまう」という言葉が印象的だった。さらに、札幌へ移動して木村と合流し、スラブ・ユーラシア研究センターで成果報告を行った後、三人で「ウポポイ（民族共生象徴空間)」を訪問した。

エクスカーション、議論、各研究機関へ提出された報告書から、本共同研究の成果は以下の三点にまとめられうる。1）各境界地域において多元性は重層的に形成されており、単一の「中心」ないし「求心力」と対比するだけでは不足であること、2）マジョリティに「共通項」だと認識されている事柄から入る「境界地域」の理解に対し、境界地域内部からの視線や声に基づいた「境界空間」の理解は、複数のディシプリンが複雑に絡み合った問題系であること、3）ドイツ時代とポーランド時代の連続と断絶を共存させた歴史展示、様々な読みを誘発するルポルタージュ文学、ドイツ語とソルブ語の二言語表記のように、対象と鑑賞者の間に「対話」を成立させる試みが行われてきたこと。

この共通の関心をさらに深化するべく、井上は 2025 年 10 月から 12 月グダンスクに研究滞在する。また、井上と木村は 2026 年春、日本スラヴ学研究会にて本共同研究に関連するテーマでシンポジウムを開催する予定である。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書　等）※謝辞の有無について明記願います。

・グダンスクのシンポジウムにおける井上、木村、ボジシュコフスカ＝シェフチクの発表を含む英語論集は現在出版準備段階にある

・日本独文学会シンポジウムでの報告論集を、来年度水声社から出す運びである（ボジシュコフスカ＝シェフチクの論文は和訳して収録）

・井上は、崎山が編集する雑誌『越境広場』次号への寄稿を依頼されている

いずれにおいても謝辞有

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

・熊本大学ダイバーシティ研究室「共同研究支援事業」（応募予定）

・グダンスク市翻訳家プログラム https://ikm.gda.pl/projekt/rezydencje-literackie/ **（応募予定）**

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。